〔研究ノート〕

風景構成法の構成型に関する文献的考察

The Review of Landscape Montage Technique Research ：From the Viewpoint of Montage Pattern

明　翫　光　宜
Mitsunori MYOGAN

キーワード：風景構成法、構成型、精神病理学、発達臨床心理学
Key words：Landscape Montage Technique,　Montage pattern,　Psychopathology,
Developmental clinical psychology

要約

本論文では風景構成について構成型の観点から先行研究を展望した。精神病理学的観点では、被検者と対象との心理的距離や内的世界を査定することが出来ること、発達臨床心理学的観点から Piaget の認知発達（自己中心性）やワーキングメモリーの機能について査定できることがうかがえた。これらの知見が発達障害臨床にも活用されることを期待したい。

Abstract

In this paper, the author reviewed The Landscape montage technique (LMT) researches from the viewpoint of Montage pattern. In psychopathology, we can assess the psychological distance between testee’s and world, and the internal world by analysis of Montage pattern. In developmental clinical psychology, we can assess Piaget's Stages of Cognitive Development (Egocentrism) and working memory too. The author expects that clinical psychologist will make good use of this knowledge for psychological assessment of developmental disorder.

1．はじめに

風景構成法とは、中井久夫が 1970 年に考案した統合失調症への治療的な関わりから発展し、現在では病院臨床をはじめとした心理臨床の現場で積極的に使用されている技法である。風景構成法は、侵襲性が低く、かつ被検者の病理をよく反映することに加え、絵画療法としての治療効果も持つことから、心理療法の中に位置づけて用いたり、心理アセスメントの一手段として利用

されている(皆藤，1994)。風景構成法は統合失調症の臨床経験の中から発展してきたため、統合失調症以外の事例研究として心身症、うつ病などを対象とした研究は少なく、特に近年注目されている自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）を対象にした研究は現在のところ発表されていない。

そこで本論文では、風景構成法の中でも構成型に注目し、ASD を対象に風景構成法を用いて心理アセスメントを行う際の必要な視点について、先行研究を概観しつつ考察を加えたい。

2．描画様式と構成について

描画が心理アセスメントとして注目されるのは、描画様式は被検者の心的構造に合わせて作られるという事実である（市橋，1972)。すなわち、描画様式から我々はクライエントの体験構造や心的構造に迫ることができるのである。この観点を風景構成法になぞらえれば以下のようになる。中井（1974）によれば、人間の行動は絶えず決断し、選択しつつ生きていく存在であり、その決断・選択のあり方は paradigmatic な選択か syntagmatic な選択のいずれかであるという。paradigmatic な選択とは、ロールシャッハ・テストに代表されるような「文の中である名詞を形容する同義形容詞の中から１つを選ぶ選択」のように、似たものの中から１つを選ぶ選択のあり方であり、syntagmatic な選択とは、風景構成法に代表される文を構成するにあたって、「この主語ならばこの動詞を使う」という風に相互に補完して全体を形成する際の選択を言う（中井，1992)。つまり、双方の選択のあり方に人間の行動様式のスタイルが反映されるといえる。

本論文で筆者が構成型に注目したのは以下の点からである。通常、風景構成法の解釈は心理療法的関わりが多いためか解釈がユング派の分析心理学の視点から行われることが多いように思われる。しかし、筆者は ASD の心理アセスメントにはまず認知特性を理解する必要があると考えている。風景構成法は、課題要素が継列的に出されるために、視点の時間移動力が問われ、さらにその異なった時間に出された課題要素を１つの全体として絵の中に統合するという高度な認知課題が含まれている（高石，1996)。つまり、風景構成法では、被検者は前後のコンテクストを加味しながら全体を形成していく自我機能が求められるのである。この視点に立てば、ASD の認知機能やそれによる行動様式が風景構成法の構成型に反映されることが期待される。風景構成法においても ASD 独自の描画特性が示されたなら、風景構成法は、例えば統合失調症と ASD 者との鑑別の補助資料としても、ロールシャッハ・テストの知見（明翫・辻井，2007；明翫，2008）とともに ASD の心理アセスメントのテストバッテリーとして重要な役割を担うことも期待される。

3．風景構成の構成型に関する先行研究

それでは、風景構成法の構成型がこれまでどのようにして研究されてきたかについて先行研究を概観してみることにしよう。

(1) 構成型の精神病理学的研究

風景構成法の構成型の精神病理学的研究は、中井（1971）の研究に始まる。中井は風景構成法を作成する過程が優れて構成的であるとし、構成が行われる空間を「構成的（心理的）空間」として注目し、風景構成法を通しての精神疾患患者の心理的空間を分類した。その後、風景構成法は主に統合失調症患者の心的構造を理解する目的で使用され、現在でもその知見は臨床的に有用な視点をもたらしてくれる。

まず、統合失調症患者の描画特性から紹介したい。中井（1971）や市橋（1972）は自身の臨床経験から統合失調症患者の描画特性についてまとめ、そこから統合失調症患者の心的構造に迫った（表 1、表 2)。なぜなら統合失調症患者の描画特徴は、描画内容よりもむしろ描画様式に示されるからである。市橋・吉田・大堀・松元・平間・田中（1971）は、統合失調症の描画様式の以下の点に注目した。描画の成立条件には事物を知覚し、意識の中で概念化され、画面の中の像として呼び起される。この時には、「意識的能動性」の働きが関与している。統合失調症患者の場合、この意識的能動性が失われ、想像力は衰弱し、それが単純性や常同性に帯びた描画に反映される。次に統合失調症の発症に伴い、描画の空間構成に変化が起きていくとした。最後に意味性の解体である。それは現実を抹消し、抽象的公式が支配しているため、独自の描画パターンで絵画を構成するという描画様式である。

市橋（1972）は、統合失調症患者の絵は、「描線の硬さ」と「全体の静止的印象」があると述べている。そもそも描線の筆圧やバランス、筆勢などは、「内的な運動の意識（空間を横切る内的時間意識)」によって作り出され、支えられている。慢性統合失調症患者の場合は、Piaget のいう同化と調整が不能になり、心の本性である自己の生成、発展、展開が失われるという。その結果、（あたかもそこで立ち止っているかのように）内的時間意識の凝固がもたらされる。このように内的な意識を動かせないこと（内的自由度の減弱）は、統合失調症患者の視角を狭め、固着させる。この現象は視点を内的な努力に逆らって動かすことができないことになり心は空虚になるという。これらの描画特性から、統合失調症患者の内的世界において、行動や思考パターンは現実密着的でありながら、個々の要素に対しては現実から離れ、空転するという矛盾を抱えているという。

筆者は、発達障害、特に ASD の描画特性についてまとめたが（明翫，2011)、その描画様式の知見を比べると、単純化や簡略化された絵がみられやすいなどいくつかの点では統合失調症と共通しているが、ASD の場合は写実的表現や絵を重ねる overlap、個々の要素を分離する fragmentation、イメージの合成化など独自の描画様式について報告されている。一方、統合失調症患者の絵の特徴として、内的自由度の減弱から描線の硬さや静止的印象などが取りあげられており、描画様式に着目すると両者の違いが明確に異なるように思われる。風景構成法のように多くの要素から成り立つ描画法では、両者の違いがより明確になることが期待される。

表１　統合失調症患者の描画の諸特徴（中井，1971 に筆者が加筆修正を行った）

特徴	心理学的意味
所要時間の短さ	これらの特徴は前意識の自由度の減弱を示唆する。逆にうつ病者や嗜癖者は所要時間が長い。市橋（1972）によれば、統合失調症患者は、写生の際に対象を見る時間が非常に短く、ときにはほとんど顔をあげずに画面構成してしまう。つまり、現実の風景に触発されつつも、独自でかつ常同的なパターンで絵を仕上げてしまう
訂正の欠如・筆のためらいのなさ	
混色（色彩の混合）の欠如	逆に嗜癖者は色彩の混合が著しく、単一の色が全くない場合がある
陰影付けの欠如	ロールシャッハテストの濃淡感受性と対応する
色彩距離効果の欠如	遠くを薄く、あるいは青みがかかった色を塗るということ傾向性がないため、「遠くのかすみ」がなく、しばしば真空、月世界、芝居の書割的（登場人物のいない舞台装置）な印象を与える
状況依存性	集団の中で絵を描くとき、治療者との２人きりで描くときとでは別人のような絵を描くことがある。状況の変動を乗り越えて描画の能動性と一貫性（自我の一貫性）を維持することが難しい
画面の枠づけへの依存性	ミクロの状況依存性を示す。健常者は状況に影響されつつも描画にその個性を貫徹する強さを持っている
言語的説明の乏しさ	統合失調症患者の顕著な特徴である。言語とイメージの風通しが格段に悪く、寛解した患者でも難しい
空白を上手に利用できない	未開拓地のような感じである

表２　慢性統合失調症患者の描画の諸特徴（市橋ら，1971；市橋，1972 に筆者が加筆を行った）

特徴	心理学的意味
描線の硬さ、全体の静止的印象	描線の硬さは、画面構成の二次元化に伴って描かれる場合が多い。それは同時に静止的な印象を強く与える。この現象は感情鈍麻と関連がある。うつ病者の絵は、描線が柔かく、遠近を強調する傾向があるし、子どもの絵は二次元的な構成ではあるが、描線がしなやかで動的であるなど慢性統合失調症患者とは対比的である
画面構成の二次元化	慢性統合失調症患者の場合、発病前は遠近法を使用していたが、発病後に奥行感が失われる。この奥行感の消失には、知覚と認識の過程が関与している。風景構成法の場合は、風景画よりも強く平面的な構成（地誌的空間）となり、内的な奥行感の喪失による空間軸の混乱があると考えられる。対照的にうつ病者の絵画は、奥行きと広がりが際立って表現され、空間の特性が整合（過整合性）される（高江洲・大森，1981）。

人物および事物の正面志向性	慢性統合失調症患者には強い人物の正面志向性がある。6〜7 歳児の描画も正面向きの描写があるが、これは相手の立場に立って考えることが出来ない、いわば世界は自分を中心に動くという自己中心性という体験構造を持っている。これはアナストロフェの体験構造に類似している。慢性統合失調症の正面志向性は、やや複雑な事情を抱えている。彼らは人を避けながらも人々を生々しく意識している。眼に関する関心は非常に強いという（高江洲，1975）。 また対照的にうつ病者の絵画では、人物がテーマになることは少なく、描かれたとしても画面中の点景となるごく小さな人物像か、あるいは後姿の人物像であることが多いという（高江洲・大森，1981）
人物画	人物像は他の描写が優れていても、人物像は単純性、変形が認められる
羅列的、積重ね的構図、個々の事物の抽象化傾向	1 つの水平面上に、事物が立ち並んで層的に積み重なった構図である。当然、奥行感はなく、静止的である。事物は記号化の傾向が強く、事物相互の緊密な結びつきがほどけ、世界を構築している感覚が希薄である。特に羅列は世界構築の不能の結果である。対象の意味性が失われ、形骸化し、構築を志しても結果的に層的に積み重なることになる。それだけに羅列は多分に説明的、記述的であり、現実密着的である。 臨床像としては心的エネルギー水準低下の目立つ解体型の統合失調症に多く、言語面でも乏しいか支離滅裂であることが多い。
対象の遠方的凝視的描画	慢性統合失調症患者は好んで遠景を選び、望遠レンズで写したように狭く限局した部分を引き伸ばす傾向がある。また比較的少人数であるものの近景だけの描画もあるが概ね慢性統合失調症患者は遠景を選び、中景を選ぶことはまれである。これは外界を遠くに置きたいという自我と外界の疎隔の体験構造に依拠している。
シンメトリー[1]	画面のシンメトリーやステレオタイプは感情鈍麻や常同行為のあるものに出現する。シンメトリーはバランス上、最も安定した世界であり、それ自体で完結し、静止的である。シンメトリーは根源的な不安への防衛とも考えられる。
境界と領域における特異な反応	輪郭線の強調（P 型）する群と各領域間に空白の分離が見られる（H 型）群がある。

次に描画特性から統合失調症の類型の分類の研究が行われた。中井（1971）は、統合失調症患者の描画特性からＨ型とＰ型の２つ分類した（表３、表４）。Ｈ型の特性は、syntagmatic な選択を回避しようとする指向性があると考え、わずらわしい細部を消去するために「距離をとる」という。中里（1984）は、アイテムとアイテムの間を空白のままに放置して無理な結合を行わない点を指摘している。これはロールシャッハ反応で言う単純形態反応による全体反応のあり方に対応する。また中里（1984）は、このような要因もあり、描画を見る者の方がその空白に対して整合的な構造を投影してしまうために、一見歪みの少ない描画に見えるのではないかと指摘している。

Ｐ型の特性は、中井（1971）は全体を強引に syntagmatic な選択を行うキメラ指向（生物学では１つの細胞内に異なった遺伝情報を持つ細胞が混合している状態をさすが、あたかもそう思わせるような風景の空間構成の仕方）であるという。風景構成法では多空間現象が示される。また「自発性不感性」があり、形態水準の低下を無視して全ての描線を有意味とみなす「超全体反応」となる。つまり、Ｐ型は空間のキメラ的構造などの不合理さを示しながらも、そのことに全く気がつかない状態である。中里（1984）は、妄想型統合失調症の場合は、アイテムを描線でもって無理に結合させるために構成が歪むと述べているが、これはまさにロールシャッハ反応でいう fabulized combination などの「悪しき豊かさ」などの反応様式と対応する。中里（1984）によれば、Ｈ型もＰ型もいずれも syntagmatic な指向性の弱さを示しているのではないかと考察している。なお中井はＨ型やＰ型の分類以外にも、様々な臨床像と対応させた風景構成法の構成型について発表している（表５）。

表３　中井による風景構成の描画類型：Ｈ型とＰ型

	線描（構成的）	彩色（投影的）
Ｈ型（解体型、消極型）	整合的な空間構成、直線、あるいは単純な曲線の多用。逆に構成を全く放棄することもある。アイテムの妥当な組合せ。人、家、木などの形式化、記号化、抽象化傾向、および一様化（特に中心的な人、家などが目立たない）、遠景のみで成る。左右対称傾向（静的印象）	しばしば冬枯れの色が主調となる（山、木、田などに）。遠方をうすく彩色したり、もやをかけたりしないため、あたかも真空の世界になる印象（構成的には正確な透視図的距離が置かれているのに色彩的距離効果が全くないという奇妙さのため、真空の世界のような印象を与える）
Ｐ型（妄想型、積極型）	非整合的な空間構成、キメラ的な多空間（後に非整合性と多空間性を区別する必要性を中井は指摘している）。力動的な曲線の多用、アイテムの唐突な組合せ。中景～小景群における個別性。ディテールへの固執。遠近の混乱。左右非対称（力動的印象：あるいは豊な混乱の印象）	豊な色数。濃い彩色。密林のような印象。しばしば Heterochromatism（現実的にはふさわしくない色彩）が見られる

表4　H型とP型における構成様式と臨床像

アンチ・パラディグマティズム （パラディグマ的選択の回避）	パラディグマティズム （強引なシンタグマ的選択）
①幾何学的主義 破瓜型の絵画、なぐり描きの描線、行動にみられる	①衒奇症 妄想型の絵画、そこに書き込まれた文字、記号など
②抽象 風景中の人物などに記号化を行う	②つぎはぎ細工 混交、風景構成法におけるキメラ的空間
③任意性の回避 なぐり描きを嫌う。類型的なものの形を代わりに描く。自発性、自由性、偶然性、偶有性の否認	③任意性の感覚欠如 なぐり描き法における「超全体反応」 空間の充盈
④個性回避 制服の人物、幾何学的ビルディングで作られた箱庭など	④個性偏執 遠方にも細部を十分に描きこんだ大きなものを描く。（例）遠い山の上の大きな百合の花など
⑤距離をとる 風景構成法における近景の欠如。わずらわしい細部を消去する心性がある	⑤近接する細部の強調、近景化
⑥ロールシャッハ・テストにおいて 少数の単純な全体反応、少なくとも主要決定因は単数である	⑥ロールシャッハ・テストにおいて Fabulized combination、DW、dr、dd、di など
⑦言語面 継ぎ穂の乏しさ	⑦言語面 文末への反応、音声連合、言語新作、継ぎ穂の過剰とずれ
⑧数学への嗜好	⑧形而上学への嗜好
⑨時間の否認 時間的変化の系列は通常パラディグマティックであるから変化を嫌う。不動のものへの嗜好	⑨距離の否認

表５　中井（1971）による空間構成の諸形式

形式	説明	臨床像
キメラ的多空間現象	複数の空間がキメラ的に接合されている	妄想型統合失調症
二重世界現象	二重写真のように２つの世界が重ねあわされている	寛解した妄想型統合失調症
真空世界現象	色彩的距離効果を欠き、月世界のような感じになる	解体型統合失調症
遠景化現象	近景を欠いた風景	解体型統合失調症
超遠景化現象	透視法の要求以上に遠景が小さく、あたかも観察者より遠ざかるような印象を与える	嗜癖者
近景化現象	近景の強調	妄想型統合失調症 ヒステリー
超近景化現象	遠景上に細部を有する中小景群を描く（遠山の上に大きな家や花）	妄想型統合失調症
鳥瞰図現象	真上から見た、地図のような風景	躁病
虫瞰図現象	遠景がそそり立ち視点が地表近くに存在するがごとき印象	うつ病
リリバット化現象	人物の狭小化	嗜癖者
巨人化現象	人物の巨人化	妄想型、ヒステリー
左近景現象	画面の左を手前にとった風景	内向型、自閉性ナルシシズム
右近景現象	画面の右を手前にとった風景	外向性、ときに反社会性
棚づみ現象	棚に積んだように、遠景近景が上下の関係におきかえられたもの	接枝型統合失調症
稜線の枠ごえ現象	山頂がみえない	不登校症例
空白の顆多	①効果的：空白が１つの効果として用いられている ②非効果的空白	①神経症：抑圧の強いもの ②統合失調症：急性症状の残存するもの
構成放棄現象	まるで文字を書くように、順にアイテムを描き並べてゆくもの	解体型統合失調症 嗜癖者

その後、中井のＨ型とＰ型に次ぐ第３の型と言うべきＤ型も分類された（表6）。これは後に固着型と呼ばれ、原始的、幾何学的構成の中に事物のつながりを放棄しているタイプである。高江洲・高江洲・吉田・国分・橋本（1976）は「間合い」という概念を導入して統合失調症者の風景画を「離反型」、「近接型」、「固着型」の３類型について考察している（表6）。

「離反型」は事物が全て遠のいて縮小した世界を描く一群である。そこでは世界内のつながりが薄れていく中で主体（わたし）と客体（まわり）とのつながりが希薄化し、事物が背きあう世界を示している。「近接型」は描かれた事物の全てが描き手の眼前に押し迫ってくる世界を、「固着型」はもはや主体（わたし）と客体（まわり）とのつながりは放棄され、離反・接近などの力動を読み取れないまま世界は砂漠のような荒涼さの中に沈み込む世界を示している（高江洲・大森，1984）。

描画からみた対象との距離について市橋（1972）は以下のように説明している。統合失調症患者は外界に対する過度の接近か、過度の疎隔かという二者択一を強いられ、外界に対して適度の距離が取れなくなっており、その体験様式が描画に出現すると考えられる。抽象は現実をより遠くに保ち、具象は現実を近くにたぐり寄せるという。また現実との距離が近すぎ、現実そのものになれば、病者を陳腐で羅列的、記述的世界に引き込み、想像力を乏しくさせる。また現実からの距離が大きくなれば外界は記号的になり妄想的になるという。この観点は、ロールシャッハ・テストのRappaport（1946）の逸脱言語表現における距離の観点と類似しており、統合失調症とASDとの鑑別を考えたときに、ASDの風景構成法において、この距離（間合い）の概念が描画にどう表現されるかが興味深い。

表６　風景構成法に見られる空間力動（高江洲ら，1976）

	離反型	近接型	固着型
構図	希薄、荒涼 遠ざかり効果	混乱、充溢 近づき効果	常同、対称 力動放棄
描線	弱々しい	強引	硬い
色彩	少ない、混色が ほとんどない	多い、混色が 非常に多い	原色
配置	並列、層構造	多次元、混沌	幾何学的
遠近	遠景化	近景化	望遠

風景構成法研究において、早期から構成型が着目されたのは、風景画の成立条件を分析することによって、クライエントの思考や存在のあり方が理解できたからであった。例えば、高江洲・大森（1984）は、統合失調症患者は空間体験において主体（わたし）と客体（まわり）との「つながり」と「へだたり」が不明分なままであり、崩壊しつつある外界と分裂しつつある自己との狭間で風景が描かれていると指摘した。その客体とのつながりの変容が「現実との生ける接触の

喪失」を反映し、うるおいのある情景が消失し、地誌的空間が露呈するとH型の風景構成法について説明している。通常、空間構造は、単に物理的距離や事物の標識作用で表現される硬く平坦な地誌的空間と感情や気分がこめられた柔軟で遠近感や奥行きのある風景的空間の2種類がある。またその2種類の空間構造は、健常者においては、お互いに相応しつつ表裏一体の関係にあり、1つに結びついて空間体験を成立させているため、裸の地誌のみが露呈することは稀にしか生じない。しかし、統合失調症患者の空間体験においては、主体と客体の混沌による風景の崩壊とともに、この地誌と風景の乖離した空間体験が露出されることになると高江洲・大森は説明している。

衛藤（1985）は、風景構成法の背景にあると想定される「世界図式」に着目した。世界図式とは、(1)主体を中心として心的空間に距離構造を与える（奥行などのパースペクティブ）、(2)発達に応じて分化・発展するもので、それは各時点での主体と世界との連続的な循環過程の一位相である（世界に対する予期・構えを決定し、行動を左右する）、(3)空間内の知覚対象あるいは対象イメージは世界図式を基準として奥行と広がりを持つ空間に定位されるものであるという。衛藤は、風景構成法がクライエントの世界図式を捉えるのに適した手段であること、世界図式の崩壊や修復過程について事例を通して考察している。

風景構成法の出発点ともいえる構成法の精神病理学的研究は、すでに武藤（2002）の論考があるが、これまでの研究知見と発達障害の描画研究の知見（諸研究者の知見を整理したものとしては例えば明翫[2011]がある）を合わせながら進めていくべきであると筆者は考えている。これらの研究知見が示唆するものは、風景画に示される被検者の体験世界である。被検者の体験世界や体験構造を理解することができれば、その体験様式に応じた治療的接近を考えることができる。発達障害の風景画においてどのような体験様式が示されるかは発達障害の精神病理学の観点からも興味深い点であり、今後の研究が期待される。

(2) 構成型の発達臨床心理学的研究

風景構成法の発達的な視点による基礎的研究は、弘田（1986）、高石（1988）、皆藤（1994）、高石（1988；1996）、多田（1996）などの研究がある。現在の風景構成法の構成型の発達的観点は高石の基準が標準的に使用されているので以下、高石の構成型を用いた研究を概観する。

高石（1988；1996）は、主として小学生の横断的研究から、風景構成法の構成型に見られる発達段階を示している（表7）。高石によれば、成熟するに従って、ⅠからⅦ段階へと段階的に移行発達していくこと、段階的に発達するにつれて「自我の視座の確立」の発達を示すことを考察している。これは最近の発達臨床心理学の知見では時間的・空間的パースペクティブの獲得であり、他者への視点の移動がより高次の社会性や共感を可能にしていく（杉山，2009）。東山・東山（1999）の絵の発達では、ただ頭に連想されたものを表現する段階（羅列型）から、多視点画

表 7　高石（1988；1996）の風景構成法の構成型（筆者が一部修正して引用）

構成型	説明	視点の数[2]	視点の位置
Ⅰ　羅列型	小学校 1 年生の 50% 課題の全要素がばらばらに描かれており、全く構成を欠くものである。風景構成法では課題の要素が継列的に出されるために、課題の指示ごとに知識の中から取り出して描く。全体を 1 つの視点から主体的に統合できないことを示す（時間と空間を同時に定位できるだけの自我が発達していない）。 ＊統合失調症の構成放棄と異なり、一つ一つの要素は生き生きと描かれ、丁寧に彩色されている。	多数	不定
Ⅱ 部分的結合型	小学校 1 年生、2 年生の子どもの 10% 大景要素同士（川、山、田、道）はばらばらだが、大景要素と他の要素とが、一部結びつけられている。基底線の導入が認められることもある。		
Ⅲ 平面的部分的統合型	小学校 2 年生で 40%、小学校 1 ～4 年生で 30% 大景要素同士（川、山、田、道）の構成が始まるが、部分的な統合にとどまり、「空飛ぶ川」「空飛ぶ道」などの表現がみられる。また彩色されていない空間が多く残り、宙に浮いた感じがする。視点は不定で、複数の基底線が使用されている。遠近・立体的表現はない。 視点は定まらず、複数の地平が共存する。つまり視点を変えないと見えないはずの物を 1 つの平面に表現する視点の混合が見られる。これは 1 つの視点ではなく様々な視点でかかれるので画面全体の統一感がなく、矛盾した表現となる（多視点画）。		
Ⅳ 平面的統合型	小学校 3 年生の 50% 部分的な統合が進み、視向（視線の注がれる方向）が一定方向に定まり、全ての要素を「知っている風景」としてまとめることが出来る。それなりに完成した、整合性のある構成がとりあえず完成する。しかし、遠近・立体的表現は見られず、全体として平面的で貼りついたような感じが特徴的である。奥行きは上下関係として表現されている。 視点は 1 つに定位されたように見えるが、実際は正面方向からみた図の寄せ集めであり、全体として多視点である。要素間の大小関係でも非現実的な側面を残している。		前方正面

Ⅴ 立体的部分的統合型	小学校４年生で35％になり、小学校５，６年生で40％ 視向が正面と真上（あるいは斜め上方）の２点に分かれ、部分的に遠近法を取り入れた立体表現がみられる。しかし、Ⅳ段階までの全体の構成の安定性が崩れるため、部分的には遠近法が取り入れられたり、立体表現が見られるが、大景要素間でも立体的表現と平面的表現が混在し、全体としてはまとまりを欠く分裂した構成になっている（試行錯誤の段階）。 例えば、「空からの川」など画用紙を上下貫く川の表現が特徴的であり、その川によって分断された左右の世界が、２つの別々の視点から統合されたり、鳥瞰図や展開的表現が見られることもある。	２点	前方正面 および 上方
Ⅵ 立体的統合型	小学校５年生～６年生の20％ 視点・視向とも、斜め上方あるいは正面の１点におおむね定まり、全体が遠近・立体のあるまとまった構成になっている。しかし、「平面的な田」、「傾いた家」など一部に統合し切れない要素を残している。	１点	斜め前方 または 斜め上方
Ⅶ 完全統合型	小学校６年生で10％ １つの視点から、全体が遠近感をもって、立体的に統合されている。		

や基底線など位置関係に秩序がもたらされ空間概念が形成され始める段階、部分知覚が優勢で見る位置を１つに定めることが難しく、空間に矛盾をもたらしながら描く段階を経て、立体感や遠近法を導入した絵へと発達していく様子を描いている。高石の風景構成法の発達的プロセスもこれと同じ様態を持つのであろう。

この構成型の発達心理学の知見が臨床場面で援用されたのは、主に非行臨床の現場からである。中島（1998）は、非行少年に「此岸なしの川」や「垂直の川」など、川の描写の在り方がその後の構成に破綻をきたすことに注目した。風景構成法の発達心理学的な視点に、幼児期に寝ていた川が、小学校３，４年生に直立し、以後斜めに流れるという経過がある（山中，1984；柳沢・岡崎・高橋，2001）。これは、自己中心的思考が優位な時は「此岸なしの川」など描かれやすく、認知機能が高まり、脱中心化が達成されると極端な形で世界を分割するため、画面の分断が行われやすくなり（川が立つ）、やがて山が取り込まれ地平の限界が設定されることで、天と地との分離が完成し、川も斜めの流れで画面に収まるという。中島は、「此岸なしの川」の心理学的意味について、枠の一辺を足がかりとした形であることから、状況依存的であり、被影響性・受動性の高さを指摘し、「直立した川」は強引な描写と整合性の配慮の乏しさから、先を見通しながら計画的に課題を遂行していく構えが弱いと同時に自己の統合性が弱く、矛盾した価値観や情動

を同時に抱えていくことの難しさが困難であるため、物事の捉え方が極端な方向に偏りやすいことを指摘した。また自己の統合度も問題にして羅列的な描写にも注目し、諸要素を取りまとめて関連付けていくという自己組織化の未熟さないし自己の融和が不十分で容易に断片化し、情動等の解離が生じやすいことを示唆している。

次に中島（1999）は、中学生年代でまれな表現であるⅠ～Ⅳ型が非行少年全体の6割を占めていることに注目した。これら段階の共通点は、視点が多数あることである（表7）。また中島は風景構成法で視点が一定し、立体表現が可能になるには、内的な表象を心の中で操作でき、1つの問題に対する多様な見方を総合し、それぞれの対応関係を認識できることが前提になると自我形成の観点から指摘している。非行少年の風景構成法表現は、現在の認知状態というよりは何らかの負荷がかかると、自己中心性の水準までに認知的退行が起こりうる可能性があること示唆している。

さらに中島（2000）では、風景構成法は与えられた課題に注意を向けながら、アイテムを描きいれ、加わるアイテムごとに変化する描画の構成状況を参照しつつ、より適切な結果となるように自己コントロールする過程であることに着目し、認知心理学のワーキングメモリーの概念を導入した。その観点から非行少年の風景構成法を分析したところ、彼らの背景にワーキングメモリーの発達不全により、基本的な課題処理能力などの内的なリソースを、状況に応じて適切な形で発揮することの困難さを見出している。これらの結果は、服部・馬場・至極・藤原・大浦（2005）による非行少年の風景構成法とパースペクティブテイキング尺度との相関研究からも構成が高度であるほど他者視点を良く獲得していると確認されている。またこの研究ではADHDの非行少年の風景構成法についても触れられており、風景として構成することの難しさが指摘されている。この点について渕上（2005）は、構成型が知能や年齢よりも極端に低い段階を示したものは、計画性や構成力といったプランニングの障害を抱える可能性があると指摘している。病院臨床においてこの観点を用いた研究に高桑（2005）の事例研究がある。そこでは羅列型を示した事例にロールシャッハ・テストに反映される創造性・内的生産性の低さ、心的エネルギーの低さ、組織化活動の乏しさがうかがえ、非行臨床からの知見を裏付けている。

高齢者の風景構成法の認知心理学的研究もある。水谷（2003）は、高齢者120名に対して認知テストと風景構成法を施行した。構成型を測度としてみた場合の奥行感はワーキングメモリーと関連する認知機能と市橋が指摘した内的時間意識の関与によって生み出されていることが示唆された。水谷（2004）は、再検査による高齢者事例の風景構成法の作品を分析し、構成過程、空間の利用の仕方について検討した。そこでは空間の部分的使用、構成要素の簡略化などはワーキングメモリーや内的表象の弱化の問題が関わって入るものの、描き手の情緒の貧困さを必ずしも表現していないことを指摘している。

4．終わりに

風景構成法の構成型に反映されるものは何か、ということをまとめとして考察したい。精神病理学的研究の知見からは、クライエントの世界の見え方・外界の体験の仕方を主に描画様式から伺うことができ、それが構成型に反映されるといえる。

発達臨床心理学的研究の知見から、構成型の発達類型によってPiagetの自己中心性から脱中心化に至る過程と空間の構成仕方を理解することができる。Piagetの自己中心性は、(1)その場限りの思考で熟考せず手っ取り早い方法で済ませるという特徴の「内省の弱さ」、(2)注意の内容と方向が定まっていないために起こる「関係性を読むことの難しさ」、(3)入力された情報を手当たり次第解釈しようとする「統合の難しさ」であるという（扇田，1958)。これは主に遠近感に関係するパースペクティブの問題である。遠近感が獲得されることは、抽象的思考、客観的思考、部分知覚と全体知覚の統合、計画性、批判的に評価・分析する力などが身につくという（東山・東山，1999；Cox，1992)。

このような視点に立てば風景構成法は、クライエントの認知発達の様態を視覚的に理解できる有用な心理アセスメントツールとなりうる。発達障害臨床を含めた今後の風景構成法の研究に期待したい。

1　シンメトリーは、統合失調症とともにうつ病者にもしばしば認められる傾向である（高江洲・大森，1981)。絵画の画面におけるシンメトリーという事実のみ取り上げれば共通するが次に述べる属性の相違点に注目する必要があると高江洲・大森は指摘している。

統合失調症心性による左右や上下の対称は、そこに奇妙な装飾的傾向、平面化あるいは現実的遠近法の無視、常同傾向を読み取ることができ、現実世界からの引きこもりを象徴する。幾何学的傾向が著明であり、生の豊かさの欠如が感じられる。

一方、抑うつ心性の絵画におけるシンメトリーは、安定性と秩序性が付与されて、生の世界への執着を象徴とするひろがりの空間が読み取れ、また画面に同時に奥行の強調が備わっている傾向がある。

この説明に従うならば、表2における「シンメトリー」と「画面構成の二次元化」の組合せに注目する必要があることがわかる。

2　視点の移動等について、精神病理学的視点から注意すべき点がある。例えば、統合失調症患者の風景構成法は、田畑は鳥瞰的になり、動物は側面像を描くことが多いといわれている（市橋，1972)。このように俯瞰図、側面図、正面図が同一の画面に描かれることは一見、多視点画のようにみえるが、多視点には「視点の自由な転動性」が必要となる。ここで市橋は、慢性統合失調症患者の多視点は、本来の多視点ではなく、正面図の寄せ集めにしか過ぎないと指摘し、以下のように論考を加えている。そこには対象空間の意識の自由な飛翔がみられず、1対1対応で硬く事物に結び付けられているという構造がある。事物の立体性・奥行感を認知するには空間内における意識の自由な移動が必要であり、その障害は結果的に表2に述べた正面志向性を強めることになる。

引用文献

Cox,V.（1992）Children's Drawings. Penguin Books（子安増生訳 1999 子どもの絵と心の発達.有斐閣）.

衛藤進吉（1985）急性分裂病の回復過程における世界図式の変遷：風景構成法による検討. 芸術療法，16，6-14.

渕上泰幸（2005）少年鑑別所入所者と発達障害：停止信号課題 SSRT と風景構成法によるスクリーニングの可能性. 犯罪心理学研究，42，209-210.

服部陽子・馬場誉史亜・至極睦・藤原美智子・大浦宏（2005）風景構成法に見られる非行少年の認知様式について. 犯罪心理学研究，42，42-43.

東山明・東山直美（1999）子どもの絵は何を語るか―発達科学の視点から. 東京書籍.

弘田洋二（1986）風景構成法の基礎的研究　発達的な様相を中心に　心理臨床学研究，3(2)，58－70.

市橋秀夫（1972）慢性分裂病者の体験構造と描画様式.芸術療法，4，27-36.

市橋秀夫・吉田洋子・大堀カツ子・松元美千子・平間幹子・田中みち子（1971）慢性分裂病者の存在様式と絵画表現. 芸術療法，3，53-59.

皆藤章（1994）風景構成法－その基礎と実践. 誠信書房.

水谷みゆき（2003）高齢者の風景構成法における奥行き表現を持つ意味について（第 1 報）：構成型と認知との関係. 日本芸術療法会誌，34（1），38-45.

水谷みゆき（2004）高齢者の風景構成法の基礎にある空間と構成要素の生成について：高齢者の風景構成法における奥行き表現を持つ意味について（第 1 報）日本芸術療法会誌，35（2），31-42.

武藤誠（2002）風景構成法のアイテム選択における二つの指向性. 京都大学大学院教育学研究科紀要，48，224-235.

明翫光宜（2008）高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴－数量的分析. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会会誌第 12 号、39-49

明翫光宜（2011）発達障害の描画研究の展望：主に人物画に焦点をあてて. 東海学院大学紀要. 4 号，215－225.

明翫光宜・辻井正次（2007）高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴－反応様式の質的検討－　ロールシャッハ法研究，11，13－23.

中井久夫（1971）描画をとおしてみた精神障害者：とくに精神分裂病者における心的空間の構造　芸術療法，3，37－15.

中井久夫（1974）精神分裂病状態からの寛解過程：描画を併用せる精神療法を通してみた縦断的観察. 分裂病の精神病理 2. 東京大学出版，Pp.157-218.

中井久夫（1992）風景構成法. 精神科治療学，7(3)，237－248.

中島啓之（1998）非行少年における統合力の問題：風景構成法からの検討. 犯罪心理学研究，36，42-43.

中島啓之（1999）非行少年の風景構成法における構成型の検討. 犯罪心理学研究，37，92-93.

中島啓之（2000）風景構成法の構成型から見た非行少年の特徴について. 犯罪心理学研究，38，104-105.

中里均（1984）急性分裂病状態の寛解過程における風景構成法の縦断的考察. 山中康裕編 中井久夫著作集別巻 1 風景構成法：シンポジウム. 岩崎学術出版，Pp.225-244.

仁科守郎（1983）絵画表現と知能・性格との関係. 心理測定ジャーナル，19（2），19‐22.

扇田博元（1958）絵による児童診断法．黎明書房．

Rapaport, D.（1946）*Diagnostic Psychological testing II*. Chicago. The Year Book. Pp.329-366.

高江洲義英（1975）慢性分裂病者の人物画と「間合い」．芸術療法，6，15－21.

高江洲義英・大森健一（1981）抑うつ心性と絵画表現：特にその臨床図像学的接近．躁うつ病の精神病理 4. 弘文堂，Pp217-251.

高江洲義英・大森健一（1984）風景と分裂病心性：風景構成法の空間的検討．山中康裕編 中井久夫著作集別巻 1 風景構成法：シンポジウム．岩崎学術出版，Pp.119-137.

高江洲義英・高江洲鶴子・吉田正子・国分京子・橋本ヒロ子（1976）精神分裂病者の風景画と「間合い」．芸術療法，7，7－17.

高石恭子（1988）風景構成法から見た前青年期の心理的特徴について　京都大学紀要 臨床心理事例研究，15，242－248.

高石恭子（1996）風景構成法における構成型の検討：自我発達との関連から．山中康裕編 風景構成法とその後の発展．岩崎学術出版社．Pp239-264.

山中康裕（1984）「風景構成法」事始め．山中康裕編 H・NAKAI 風景構成法：シンポジュウム．岩崎学術出版．Pp.1-36.

柳沢和彦・岡崎甚幸・高橋ありす（2001）風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化およびそれに基づく空間構成に関する一考察：幼稚園児から大学生までの作品を通して．日本建築学会計画系論文集，546，297-304.